

世界遺産アカデミー特別講座 隔週連載第3回 『ルネサンスとは何か？』

前ユネスコ事務局長顧問 服部 英二

ルネサンスは、西ヨーロッパに大きな価値観の転換をもたらしました。ギリシャ的理性＝ロゴスを重視する啓蒙主義への序章です。当時のヨーロッパは、もうひとつの新たな文明に出会います。それが東洋文明です。16世紀に本格化する大航海時代は、中国や日本など東アジアの価値観と西ヨーロッパの価値観の邂逅を演出しました。ルネサンス期のイタリアの調度品に注視すると、象嵌細工や寄木細工、精巧な隠し場所が組み込まれた引き出しといった、明らかに中国の影響が認められます。また、ルネサンス庭園とも呼ばれるイタリア式庭園の特徴のひとつに、洞窟の存在が挙げられますが、こちらも中国式庭園に見られる“穴のあいた岩”から得た着想であり、道教の影響があります。「Grotto(洞窟)」から「Grotesque(洞窟趣味)」という美術様式が生まれ、「Grotesque」が「異様なもの」の語源となったように、西ヨーロッパが出会った新しい価値観への憧れと畏れが垣間見えます。



フィレンツェ、ヴィッラ・ディ・プラトリーノにある『アペニン山脈の巨人像』ジャンボローニャ作



中国の世界遺産『蘇州の園林』にある、環秀山荘の洞窟庭園

ルネサンス絵画に目を移すと、中国の山水画からの影響や、仏教美術から感化を受けた形跡も見受けられます。たとえば、レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452-1519年)の『聖アンナと聖母子』や『モナ・リザ』の遠景と山水画との類似性です。



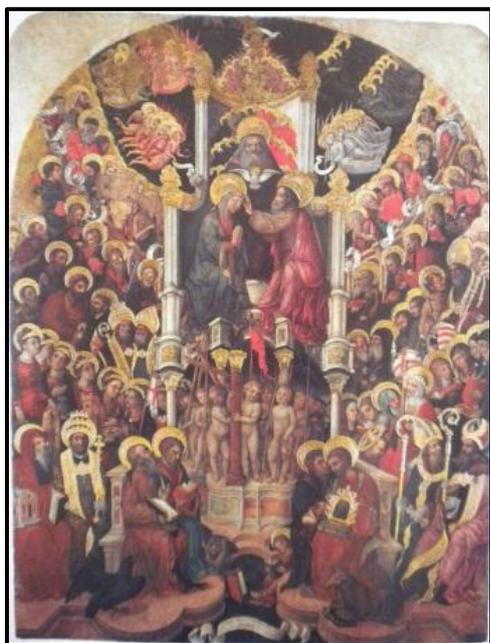
『モナ・リザ』レオナルド・ダ・ヴィンチ
(1503-1519年頃作) ルーヴル美術館所蔵



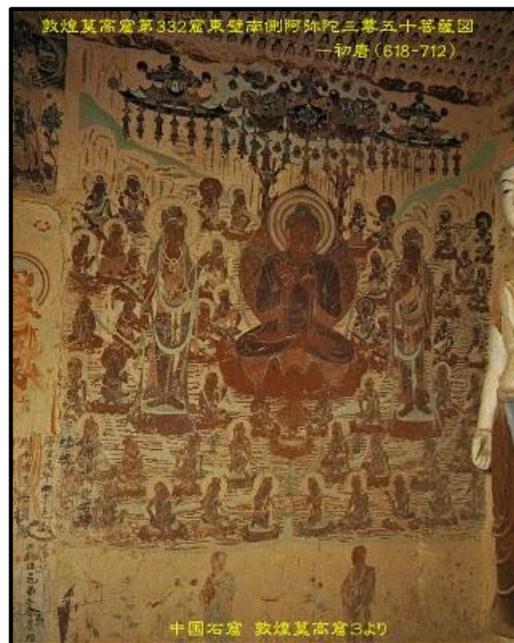
『聖アンナと聖母子』レオナルド・ダ・ヴィンチ
(1510年頃作) ルーヴル美術館所蔵

また、絵画に描かれている光背にも、仏教画との関連性がうかがえます。

大航海時代以前の、ミケーレ・ジャンボローノ(1400-1462年)作の『天国での聖母戴冠』に描かれた光背と、『敦煌の莫高窟』内332窟の壁画『阿弥陀三尊五十菩薩像』の光背との関連性は、ヨーロッパの起源がオリエントにあることの証しとも受け取れます。



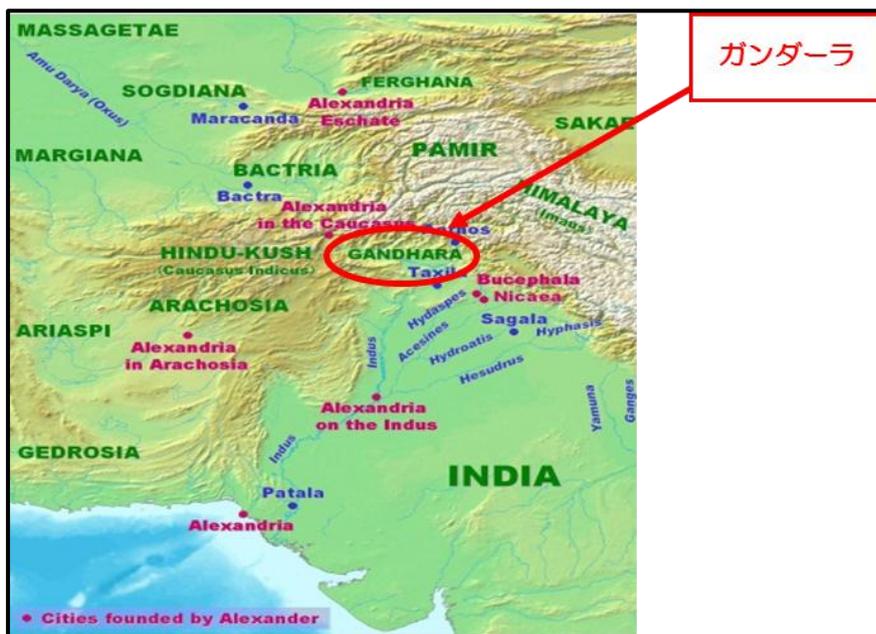
『天国での聖母戴冠』ミケーレ・ジャンボローノ
(1448年作) アカデミア美術館所蔵



『阿弥陀三尊五十菩薩像』
(355-366年頃作) 莫高窟内

このような光背の出現は、2世紀から4世紀のガンダーラに遡ることができます。ガンダーラは、パキスタン北西部のインダス川上流地方です。この地はまさに「文明の交差点」で、数多くの文明が出会い、融合された場所です。紀元前6世紀のアケメネス朝ペルシアではダリウス1世がゾロアスター教を受け入れ、紀元前4世紀のマケドニア帝国においてはアレクサンドロス大王の時代にギリシャヘレニズム文化が融合し、紀元前3世紀のマウリア朝ではアショカ王が仏教を守護しました。これらの出会いが、今に残る“形”としての仏像を完成させ、菩薩を誕生させます。

ガンダーラ地方北部のスワット・ヴァレーには2世紀頃に描かれた数々の菩薩の岩絵がありますが、ここにも光背が描かれています。菩薩の誕生により大乘仏教が生まれ、その拡がりは大乗仏教が各地に影響を与えながら世界宗教へと変遷していく様相を呈しています。まず東に向かった大乘仏教は、パミール高原を迂回して、3世紀には新疆ウイグル自治区のキジル石窟、4世紀には敦煌の莫高窟にある『阿弥陀三尊五十菩薩像』となって現れるのです。さらに、朝鮮半島を経て、7世紀には日本に到達し、法隆寺の金堂壁画を造り出しました。



パキスタン北西部ガンダーラ地方

※赤い文字の都市はアレクサンドロス大王が発見した都市



法隆寺の金堂壁画『阿弥陀浄土図』上部（7世紀末頃）※1949年の火災前の状態

時代を前に遡ると、インド洋の季節風“ヒッパロスの風”が、1世紀に発見されました。エジプトとインド洋を結ぶ航路の始まりは117年頃とされ、インドとローマもこの時点で結ばれたのです。

東ローマ帝国で誕生したビザンツ美術の特徴のひとつとして、モザイク壁画の宗教画に確認できる光背の起源も、ガンダーラにあると考えられます。

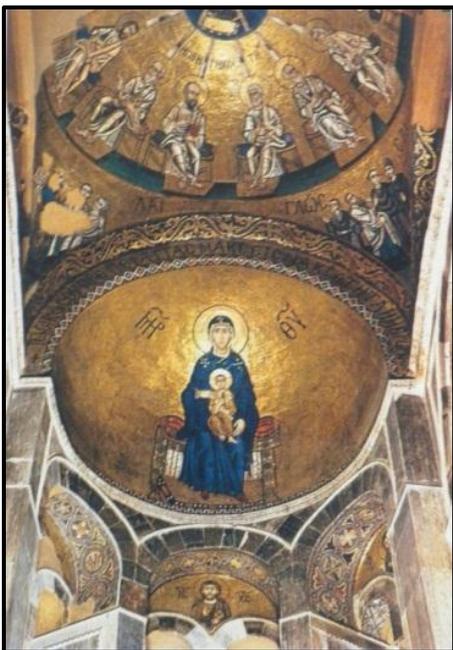


『聖母子』パオロ・ヴェネツィアーノ
(1354年作) ルーヴル美術館所蔵

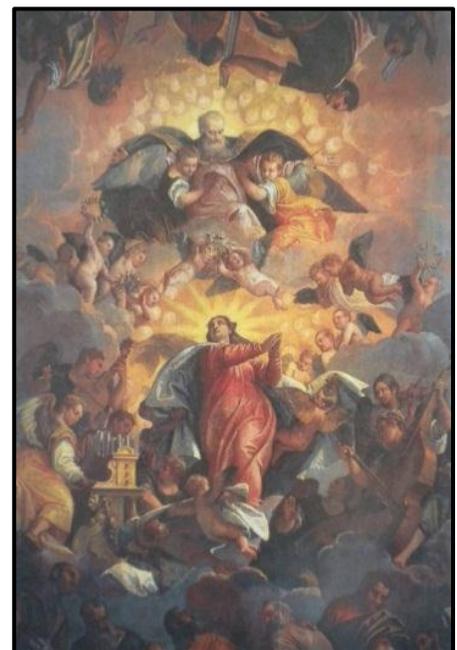


『外套を纏う聖母と洗礼者ヨハネ、伝道者ヨハネ』
ヤコベッロ・デル・フィオーレ (1415年)
アカデミア美術館所蔵 (ヴェネツィア)

西欧とビザンツ帝国の接点であるヴェネツィアにルネサンスが興ると、ビザンツ美術の影響を受けたヴェネツィア派が一世を風靡し、「聖母被昇天」をテーマとした作品が次々に生まれました。



ギリシャのオシオス・ルカス修道院内の
聖堂ドームに施されたモザイク壁画 (11世紀作)



『聖母被昇天』パオロ・ヴェロネーゼ(カリアーリ)
(1585-1588年作) アカデミア美術館所蔵(ヴェネツィア)

レオナルドの『岩窟の聖母』は、ほぼ同じ図柄の絵がふたつ存在します。

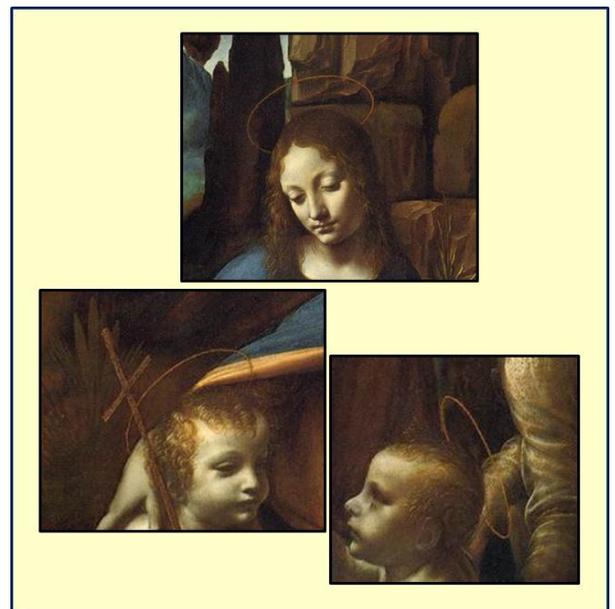
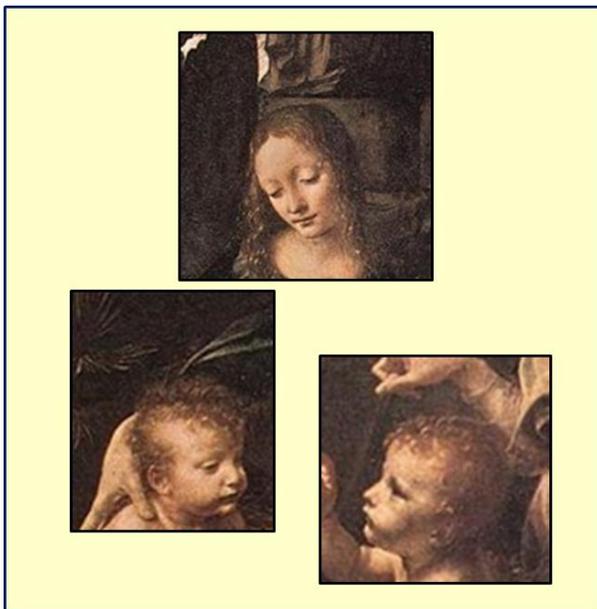
ひとつは 1483 年から 1486 年に制作されたルーヴル美術館所蔵のもので、もうひとつは 1495 年から 1508 年に制作されたナショナル・ギャラリー所蔵の作品です。2枚の絵は、ほぼ同じデザインですが、光背の有無にその決定的な違いがあります。レオナルドは人間再発見のルネサンス期にあつて人間としての聖母子を描きましたが、光背を持たない聖母子の姿に、注文主であった英国王室から受け取りを拒まれ、絵を描き直したのです。当時の英国王室には、宗教画に光背は欠かせないもの、という認識がありました。このエピソードもルネサンスにより出会った異文化の影響です。



『岩窟の聖母』レオナルド・ダ・ヴィンチ
(1483-1486 年作) ルーヴル美術館所蔵



『岩窟の聖母』レオナルド・ダ・ヴィンチ
(1495-1508 年作) ナショナル・ギャラリー所蔵(ロンドン)



このように、新しい文化と出会った時、その文化は新しい価値観を生み出します。
ルネサンスはギリシャ的理性への回帰だけでなく、異文化との出会いでもあったのです。

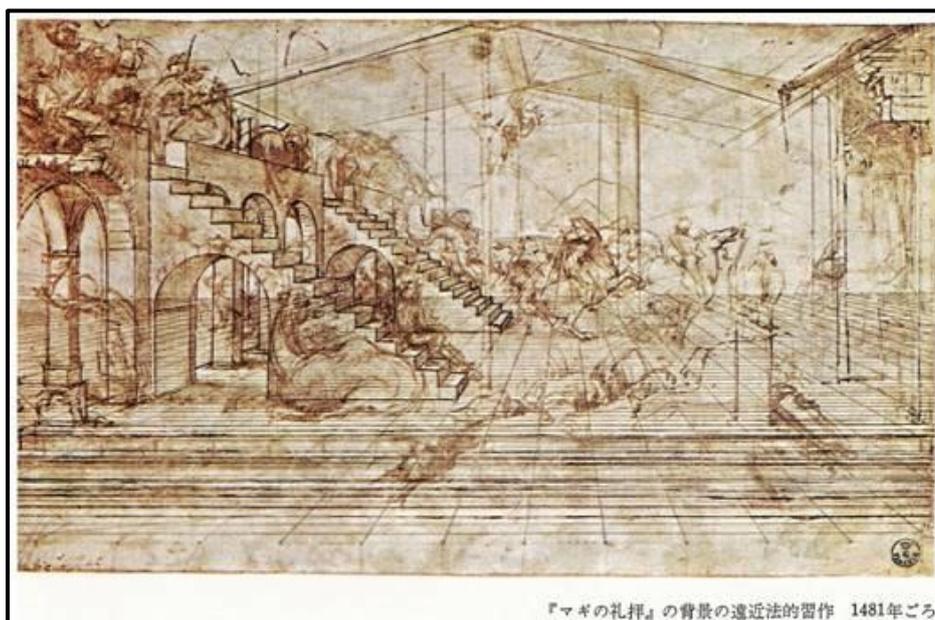
【パースペクティヴ(遠近法)から印象派へ-日本の屏風絵・絵巻との比較-】

「遠近法」という言葉の意味として、長谷川等伯(1539-1610年)の『松林図屏風』のような“濃淡遠近法”を含ませる人がいますが、私はその立場を取りません。なぜなら遠近法とは「パースペクティヴ(Perspective)」の直訳語であり、「見通し」を意味するからです。遠近法の本質は、一点からの視点から客体化した対象物を冷静に写実していくことにあります。

『最後の晩餐』では、一点に収斂していく“三角形”が現れます。日本の屏風絵や絵巻には一点からの視点はなく、遠近法と真逆に位置する表現法であり、写実的ではありません。対象を客体化することなく心象を描くことに重点を置き、移動する視点から対象を捉える。そして、物語に不要なものは消去していく。移動する複数の視点が、屏風絵や絵巻に、独特の世界観を生み出しました。この世界観を創り出す精神性は装飾性の中に強く反映されていて、『紅白梅図屏風』や『動植綵絵』の「貝甲図」などは、ヨーロッパでも高く評価されています。

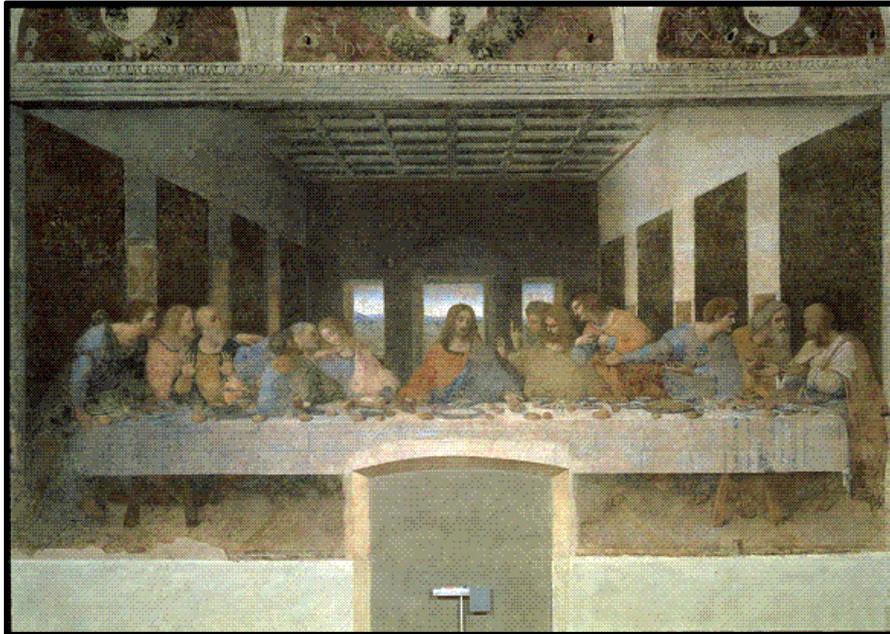


『マギの礼拝』 レオナルド・ダ・ヴィンチ (1481-1482年作、未完) ウフィッツ美術館所蔵



『マギの礼拝』の背景の遠近法的習作 1481年ごろ

『遠視画法によるマギの礼拝』 レオナルド・ダ・ヴィンチ (1481年頃作) ウフィッツ美術館所蔵



『最後の晩餐』レオナルド・ダ・ヴィンチ（1495-1497年作）サンタ・マリア・デル・グラーツィエ修道院



『上杉本 右隻 洛中洛外図屏風』狩野永徳（1561-1565年頃作）米沢市上杉博物館所蔵



『紅白梅図屏風』尾形光琳（1711年頃作）MOA美術館所蔵

日本の装飾芸術は、蒔絵なども含めて、日常生活に使う道具にまで美を施しました。かつてのヨーロッパでは、日本の価値観とはまるで別物で、普段使う道具が作品として評価されることはありませんでした。道具の作者が知られることはなく、美術館などに展示されることもありません。道具にも美を追求する、日本の精神性は、アール・ヌーヴォーに影響を与えました。エミール・ガレがガラス工芸家として高い評価を受け世界中に名前が知れ渡ったのも、日本美術の世界観があっけはじめて、実現したものです。

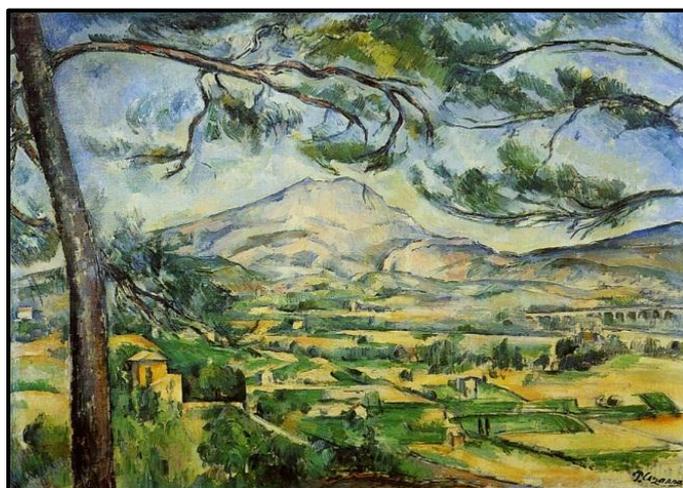


『動植綵絵』のうち「貝甲図」 伊藤若冲
(1761-1766 年作) 三の丸尚蔵館所蔵



『花瓶』 エミール・ガレ
(1898 年作) パリ市立プティ・パレ美術館所蔵

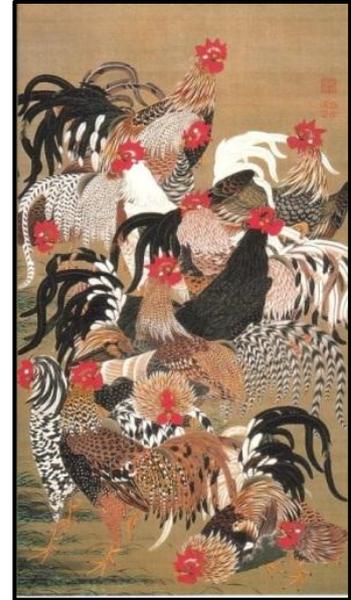
日本美術の世界観は、印象派にもまた大きな影響を与えています。遠近法を駆使した写実主義が主流だった 19 世紀のヨーロッパの美術界は、1867 年のパリ万国博覧会で、日本画の、移動する視点が表す空間表現に、出会います。さらに 1878 年に開催されたパリ万博では、ジャポニズムが一大ムーヴメントとなりました。当時活躍していたのは、クロード・モネやポール・セザンヌに代表される印象派の画家たちです。モネは自宅に日本的な橋を造り、歌川広重の浮世絵を蒐集するほど、日本を愛していました。セザンヌの『サント・ヴィクトワール山』に着目してみると、全体的な濃淡はありますが、パースペクティブはありません。セザンヌの静物画に描かれているのは、一点の視点ではなく、複数の異なる視点から描き出されたモチーフであり、移動していく視点なのです。また、伊藤若冲の『群鶏図』にも見られる自由な平面構成は、パースペクティブを拒否し、隠れた魅力を引き出しています。日本ではセザンヌを好む方が多いように思います。写実主義の遠近法の視点ではなく、移動する視点でもって心象を描くセザンヌに、私たちが心惹かれるのは、そこに日本人独自の感性を得られるから、かもしれません。



『サント=ヴィクトワール山』 ポール・セザンヌ (1887 年頃作) コートールド・ギャラリー所蔵(ロンドン)



『リンゴとオレンジのある静物』 ポール・セザンヌ
(1885-1900 年作) オルセー美術館所蔵



『動植綵絵』のうち「群鶏図」 伊藤若冲
(1761-1765 年作) 三の丸尚蔵館所蔵

【感性の響き合い】

中世の西欧は、カトリックの神聖さが価値観の中心となっていました。その神聖さを否定し、理性に重きを置くことで、近世に啓蒙主義が誕生しました。19 世紀になると、今度はルネサンスの写実主義的な視点を否定するものとして、印象派が登場します。これは、理性ではなく、感性の出会いによるものです。しかしながら、ルネサンス期にも東洋美術の影響が存在していたことは、既にお話した通りです。

「およそ創造とは、自らの文化伝統に立脚し、他の文化伝統と出会うところに開花する」

2001 年、UNESCO が発表した「文化の多様性に関する世界宣言」の一文です。文化・文明は出会いによって生成されます。ケルトとギリシャ、ヘレニズムとヘブライズム、西洋と東洋、様々な出会いが多様な文化を創造してきました。価値観は違えても、通底する感性を見逃さなければ、人類それぞれの文化や伝統は、これからも大きな花を咲かせるはずで

完

※画像データ出典:2011 年5月 28 日(土)服部英二氏特別講演会資料より